一一・九屈辱の日の思い出

遺族　溝口生松

そこは死と地獄の町

何のゆえのはずかしめか

昭和三十八年十一月九日午後三時十五分、三池三川鉱で炭じん大爆発。

その日から、私たちの悲しみの人生が始まりました。

二番方勤務の者が、やっと坑内についた頃、ドーン、という音がしました。地震だろうか、と思ったとたん、長崎の、あの原爆雲のような真っ黒い煙が、三川鉱から噴き出していました。

組合の三川支部にかけつけました。何がどうなっているものな、さっぱりわかりませんでした。

安否を気づかい、集まってきた人たちで、やがて三川鉱の正門附近は道路を埋めつくす人だかりとなりました。

何もわからないまま、暗闇がせまってきました。

三川鉱前に、やがて安全灯の番号と、その使用者の氏名がはり出されましたが、それを一つひとつ指でおさえながら見ていっても、すべては未確認ということでした。

八時十五分頃だった、と記憶しています。会社が正式発表をするというので、みんなは三川講堂につめかけてゆきました。

宮地副長がみんなの前に立って「坑内には、もうガスはありません」といいました。

「では、入坑中の者は、みんなどこにいるとですか」、といいますと、宮地副長は、だまっているだけでした。

「看護婦がここに三人います。酸素ビンと強心剤をもってゆきます。坑内にさげてください」、とだれかがたのみました。

「そういうことはできません」と、宮地副長はいいました。

「三池闘争の最中に、あんたたちは、第二人工島から、バケットで人間ばさげたろうが。でけんことはなか」

「お前は、坑内を見てきたか」いろんな声が飛びます。

宮地副長は、「いいえ」といいました。

「どげんなっとるかわからんで何がいわるるか。早よう、坑内にいって、みんなをつれてこい」

みんなの声はいつの間にか抗議にかわっていました。

これは実に、爆発後五時間もたったときのことでありました。

三川鉱の正門から、一人、二人、三人と、昇坑して出てくる労働者がありましたが、どの人にたずねてもただ首をふるばかり。顔をそむけて、ぼんやりと、要領を得ない返事ばかりでした。

この人たちはいったい、どうしたのだろうか、と不思議でなりませんでした。が、今から思いますと、みんな重症の中毒患者だったのです。

途方に暮れながら三川支部に坐りこんだまま、すすめられるお茶さえ手につかず、時は流れてゆきました。

そのうち突然、組合幹部の方から、「地域の人は遺体確認にいってください」、との連絡がありましたが、余りのことに心が定まらず、すぐにかけ出してゆく気にもなれませんでした。

それでもやっと気持をとりなおし、三井天領病院に向かったのでしたが、その頃はもう、夜も十一時を過ぎていました。

きっと遺体を運んでいたのでしょうが、けたたましくサイレンを鳴らしながら、大きなライトをつけた救急車やトラックがひっきりなしに走りまわるなかを、私たちは縫うように走りました。

天領病院に着きますと、外科に運びこまれた遺体には、すでに×印が白墨で書かれていました。

「ハイ。耳鼻科ゆき」、という係員の事務的な冷たい言葉が、今も耳の底に焼きついています。耳鼻科はそのときすでに、死体洗い場に急変していたのでした。

案内されて、室内に足を一歩踏みいれたとたん、私はガク然としました。なんとそこに見たものは鉄の運搬台の上にころがされていた、一糸まとわぬ姿の遺体でありました。その遺体に、ホースで水をかける係員。泣き泣き、白布をつかんで洗う看護婦さん。どの遺体の顔も石炭粉と、血と、泥とにまみれ、見られる姿ではありませんでした。

なかには、近所の人の冷たい遺体もありました。いろが白く、まじめな人でした。

思わず「冷たいでしょうねエ」といいますと、ホースで遺体を洗っていた係員がいいました「これはお湯です」と。でも、湯煙は立っていなかったのを、私はハッキリ見ています。

涙はとめどもなく流れ、初めて事の重大さをさとった私はついに耐えかね、「なぜ、炭鉱に働く人間はこんなひどい目にあわんなんとですか。むごすぎる」、と相手かまわず抗議したことを覚えています。

「ハイ、次」、といわれ、再び部屋にはいりますと、たった一枚床の上に敷かれた荒ムシロの上に冷たい遺体が四体、寝かしてありました。そのなかに、二人の地域分会長の遺体がありました。

特に一人の分会長の遺体は、前歯が全部欠け落ち、鼻は半分以上も削りとられ、後頭部には、こぶしがすっぽりはいるほど大きな穴があき、全身血にまみれ、石炭粉にまみれ、余りの無惨さに全身ガタガタふるえ出したことが、きのうのことのようによみがえってきます。

なぜ、何の罪のために、炭鉱労働者はこうも、非道なはずかしめをうけねばならないのか。

三池闘争をたたかったからか。ホッパーを守り抜いたからか。三百十三日のストライキをもって、権力をたたかったからか。

それにしても、現実は余りにも残酷過ぎました。

次つぎと運びこまれてくる遺体を洗い場にころがし、坑内着を切り裂き、まる裸にして遺体を洗いそのあと、にわか造りの棺におさめ、そしてトラックで、遺体安置所に一変しました三井鉱山の体育館に運ぶ、流れ作業。私はそこにこれほどひどい流れ作業が行われていようなどとは、思いも寄らぬことでした。

遺体として運びこまれてくる人のなかには、まだ脈はくがうっている人がいたり、またゆさぶっていたら、突然息を吹き返して「うーん」とうなり声をあげ、両手を虚空に突きあげる人がいたり。

もう、人の世の出来ごとではありませんでした。まさにそこは、死の町、地獄の町でありました。

天領病院を、三川鉱を、重苦しい空気が包みこんでゆきました。

そのなかで、夜は白じらと明けてゆきました。

爆発が起きてから、二十九時間もたったときでした。つれてゆかれた体育館には、柩がギッシリとならんでいました。

柩にとりすがりながら、絶句する子どもがいました。

「お父さん、子どもと私を残して、なぜ死んだつですか」、と呼びかけながら、今は氷のように冷たくなった夫の顔をなでている、妻の姿もありました。

それでも、私の涙はかれてしまったものか、一滴の涙も出ませんでした。

「あア、できることなら、自分の体温で暖めてやって、ひと筋のいのちの火をともしてやりたい」と、甲斐なきこととは知りながらも、私たちは父、息子、夫、兄弟たちの遺体を、そっとゆさぶって見たものでした。

三井はこうして、四百五十八人の労働者を殺し、八百三十九人のなかまを傷つけたのです。

私たち労働者はもともと、労働力とそ売っても、いのちまでも売った覚えはありません。それにまた、こんな無情な目がこないためにこそ、あの三池闘争をたたかったはずなのに、三井はこれほどひどい仕打ちを労働者のうえに加えたのです。

そのうえ、こんな事実さえあります。

私たちは遺体につき添いながら一時間以上もまたされましたが、その間、あちらから一つ、こちらから一つと、柩が担ぎ出されてゆくのでした。たしかめて見ましたら、「職員の方から先におくっている」、ということでした。

三井鉱山は労働者を殺してからまでも、これほどの差別扱いをしていたのです。

耐えかねて抗議しました。さすがにそのあとは先着順に、柩を運び出すことになったのでしたが、こんな三井が許されてよい道理はありません。

五十三歳で死んでいった労働者は、坑底のベルトのうえに、白墨の跡もあざやかに、こう書き残しておりました。

「いま十時。もう、身体がもたん。サヨナラ」

苦しい息の下で、みんながどれほど生きようとのぞんだものだったか、このひとことがよく物語っています。十時といえば、爆発から七時間もたった時のことです。三井鉱山がいかにあのとき救援活動をサボったのか。ここにはっきりと示されています。

三井鉱山に、もう少し人命第一の考えがあったならば、これほどむごい災害は起らずにすんでいたはずです。そんな三井を、私たちは断じて許すことができません。死んでいった父、息子、夫、兄弟たちの魂を、私たち自身の魂としてうけ継ぎ、あくまでも、殺されていった者のいのちを返せ、CO患者をもとの体にして返せ、再び労働者を殺すな、と要求したたかいつづけてゆく覚悟であります。

×

この一文は、大災害裁判第七回公判の際に陳述されたものの抜すいです。紙数のつごうで、カットを余儀なくされました。

恐怖の体験記

最終回

三池大爆発、坑底からの告発

故　松島義信・遺稿

私は不思議なKさんの様子をしばらく見ておいてから、静かに近づいていった。

「Kさんよ、じっと坐っとかんな。今、立って騒動すると悪かばん」

そう言って肩を叩くと、Kさんは私の顔をじっと見て、「坐れてな。立っとるとでげんとな」と、ぽつんと言ってその場に坐った。私が誰であるか、全然わからぬ様子である。

ところが一分もたたぬうちにまた立ち上がってわめき出すので困ってしまった。さきほどの歌をうたう人と同じで、完全に頭をやられているのに違いない。救護隊の人にお願いして、つれて行ってもらった。

それからまた二人で排気道の方へ入って行きかけたら、分会員のTさんが走って来て言った。

「おったばん。三人共見つかった。」

走って行くと、三人は静かに休み、医者から注射してもらっていた。

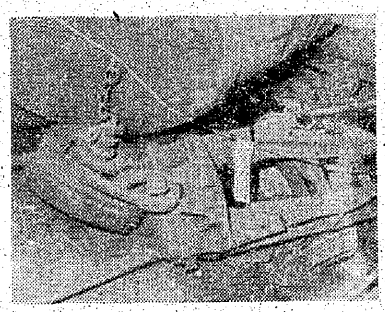
私は何も言わず三人の顔を見ていると、何か、体の中からすうっと、いっぺんに力が抜けて行く様に思った。

見つかったのだから、一分でも早く坑外に上げねばならぬ。で、担架を探したが、ない。救護隊に聞いても、ないと言う。

よし、そんならみんなでかついであがろう。交替でかつげばいいではないか。皆の意見が一致した。

一人に三人づつついて昇坑する。まわりには、坑外にあげてもらうのを待っている人達が、米俵を転がした様に横たわっている。さきほど歌をうたっていた人は見当たらぬ。恐らく、同僚がつれて行ってくれたのだろう。

手足を、針金でレールにしばられている人がいる。この人は自分の頭をアーチ枠に打ちつけるので、はじめのうち四～五人でおさえていたが、被災者が多くなって後では一人が二人か三人のかけもちで看護しなければならない状態となり、仕方なくこの様な処置をしたのだった。



あっちこっちで、パチパチ、パチパチ音がしているのに気づいた。眠ってしまおうとする人を眠らせまいとビンタを打っている音だった。それも今は手のひらでなくて、木の端やハンマーの柄、あるいは地下足袋で。もう打つにも、どの人の手のひらも真っ赤にはれあがって、痛くて打てないためだった。

一人で二枚の木の端を持ち、二人の人を交互にいっしょうけん命に打っている人もあった。打つ人も打たれる人も、同じ様にいっしょうけん命に生きようとしていたのだ。

「眠るな。こら。眠っといかんぞ」

今や声もかれ、それでも叩いている人達だった。ぎりぎりのどたん場におかれた時の人間の愛の姿だった。

三池労組員もなく新労組員もなかった。生への最後の執念を燃え立たせている人間――私はこの尊い姿を、一生忘れる事は出来ないだろう。

私達の分会は、全員で三人のなかまをかついで宮浦鉱の坑口へと急いだ。思えば九日の朝七時四十分に入坑してから、もう十五時間以上を経過している。普通の日の事だったら、腹が減って力が出ない筈である。しかし、その時空腹感など全然なかった。体がきついとも思わなかった。ただ、生きて坑外へ昇るんだ、という執念の灯が、お互いの胸の中に燃え続けていたのではなかろうか。

昭和三十八年十一月十日午前零時十分、私達は三人のなかまを全員の力で昇坑させる事が出来た。同時に、私をはじめ全分会員が生き抜く事が出来たのだった。

宮浦鉱の坑口の明りが見えたその時、私は生きていると言う事がこんなにも嬉しい事なのか、生きると言う事が、人間にとってどんなに大事であるかと言う事を、自分の小さな体全体で感じ取ったものである。